長尾和宏先生

お暑い毎日ですが お元気でお過ごしでしょうか。私は80年ぱの老婆です。先生の『本』ばあちゃん……ボケるで！”を拝読しまして私も介護現場の恐しい現実をお知らせしたくてペンをとりました。私の親戚のK子さんのかわいそうな最期は涙なしでは語れません。お忙しい先生には読んでいただけないかも！とは思いましたが、例えそうであっても私のこの気持を道端のお地蔵さんにでも聞いてもらえればそれでもよいと思って書いています

優しかったK子さんは八十過ぎまで小さな会社を経営して いましたが独り暮らしは火の始末が心配だからーと周囲の

（民芸和紙）

勧めもあって当時、四国と九州に沢山出来たグループホームに入った
のでした（本人は余り乗り気ではなかったようでした）しかし、これが
恐ろしいことの始まりでした。決して許すことは出来ません。
Kさん奥さんは独身でしたから子供も無く ホームからの連絡やお世話は
親戚のSさんがやってくれました。入居した最初の数日間は職員達も
ニコニコして「Kさーん、Kさん かわいい！」等と九十近い婆サンに
向って心にもないお世辞を言うのだそうです。しかしSさんにも家庭が
有りますし毎日ホームに行く訳には参りません ホームからは腹立たしい程
電話がきて「Kさんが塗り絵をしないから困る」とのことで行って見ると
Kさん奥さんは「わたしは、ぬり絵は嫌いなの」と云って描くつもりはありません

（民芸和紙）

この絵の指導もホームの収益になるのでした。更にコーヒー好きのKさんはすぐ近くのカフェに行きたくてもホームの規則で頑として玄関の鍵を開けてくれないのが悲しいようでした。まだ呆けてもいないのにまるで監獄の囚人扱いでした。時々Sさんが連れ出してカフェに入り散歩させますととても生き返ったように喜んで自慢の趣味のよい小物等を見つけては惜し気もなく買ってくれたそうです。しかしホームの職員がドライブに連れ出すとすぐ車代五千円、補聴器の電池を買いに連れ出すとすぐ又、五千円。しかしお金の請求で済むうちはまだよかったのです。弐日Sさんに電話かきて、「Kさんが食事の時、植木鉢の土を他人に投げつけた」と

(民芸和紙)

言ったそうです。それを聞いた我々は「嘘だ」とすぐ解りました
おいしいものが大好きで少食のKさんは人食べ方も上品で、まかり間違っても
食事中のおじいさんに向って植木鉢の土をほじくり出して投げつけるなんて
する筈はありません。今にして思えばそれはホームの収益を上げる為の
作り話の第一歩でした。作り話は段々とエスカレートしてゆきました
最後は到頭、「Kさんがホームの事務室に入ろうとして仕るす邪魔をする」
と言い出しました。たまりかねたSさんが「優しく注意してみて下さい。聞きわけの
無い人ではありませんから」と頼んでも「業務に差支える」の一点張り。
例えば「Kさん、今は仕る中よ」とやんわり注意すれば「あっそうでしたか
スミマセン」と言えるKさんなのです。事情を聞けば理解力も

(民芸和紙)

ユーモアも有り、人に迷惑をかける小母さんではありませんでした
その中、ホームは本性を現して「これ以上はホームでは扱えないから病院で
診察して下さい」との事で5月は何が何だか解らず、ホームへかけつけましたが
現れたKる小母さんは善悪と何も考えず「何しに病院へ行くの？」と
無邪気な顔をしていた由、ロビーに居た入居者達は「このKるさんの
言わることは全部正しいよね」と言って下さったそうです
疑いを知らぬKる小母さんはホームの職員、二、三人に連れられて遠い病院へ
向かいました。これが地獄の一丁目とも知らず車から下りたKるさんは
元気な足どりで病院の中へ入ったそうです。小柄なKる小母さんは
強い足が自慢でもあり、残りの人生を生きてゆく頼みの武器でも有りました

(民芸和紙)

このあと何をされるかも解らず二人で診察室へ入りました。この大きな病院は何故か車椅子の患者ばかりが ぞろぞろ居ると評判でした。Sさも その時「何だろう この人達?」と思ったそうです。診察室では一見 温厚そうな医師が診察して、何故か「この患者さんは全然呆けてはいません よ 受けこたえもしっかりしておられます」と言った由、Kさんも Sさも 驚かされたそうです。ホームで言う 困り者では なかったのです しかしSさに向って 医者は「一週間待っていて下さい」と言った由。何を一週間待つのか? と 不思議に思ったけど その日は帰宅したそうです。その一週間の中に、ホームと 結託した医者は一体何をしたのか!! 今となっては もう取り返しがつきません この一週間後の恐ろしい光景は、Sさのみならず 我々も 息をのんでしまいました。

(民芸和紙)

ヨロヨロの足にさ小たKさ小お婆さんが悲しい顔で壁に依りかかって立っているのを
やっとの有様で「どうしたんだろう。あたしはどうなった人だろう」と泣かんばかりの
悲しい顔で訴えた由。Sさは事の重大さに漸く気付いて小お婆さんを
抱きかかえ自分の足もガタガタと震えて こんな事さ小てー人間を何だと思って
いるのかーと、へたりこんでいる小お婆さんを持ち上げた。「これは犯罪だ！」と叫びたかった
そうです。この病院はホームと結託して次々と手頃な力モの足を麻痺させては
介護度を1-2から4-5へ上げて金儲けしているんだ。ーとはじめて解ったそうです
老母の頼みの丈夫な足を一週間かけて麻痺させ車椅子に乗せて
毎月35万ー37万の収益を上げるホーム。これは殺人行為と同じです
若い時から一生懸命に働いて貯めた大事なお金でホームに入り老母を安心して

(民芸和紙)

託せる筈が……。これは人間の皮を被った悪魔の仕業です。私が今でも
ハラワタが煮えくり返る程、怒りたいのは、退院前日ホームの職員三人が
病院へ偵察に来てKさんをぐるりと取り囲んで萎えた足の状態を
ジロ〳〵眺めて「ウンうまくいった。これで介護5になった」と言わんばかりに
笑ってたと言うのです。一見、労わるかの如きの態度で「Kさん、退院出来て
よかったですね。明日ホームに帰れますよ」と心にもない挨拶をするが
しらじらくてSさんはKさんが不憫でならなかったそうです。翌日
ホームに帰ると皆に「お帰りなさーい」と言われて、気の優しいKさんは
まさか自分の足を麻痺させられて生まれもつかぬ不具者にされたとは
夢にも思わず「有難うございます」と返事するのがかわいそうで〳〵

（民芸和紙）

泣いても詫びても　とり返しはつかないと　Sさんは自分の心が折れそうだったと涙声でした。
そんなSさんはオムツを当てられ介護4～5の寝たきり老人の階へ移され
「あたしはどうなるんだろう。どうなるのかしらっ」と事情をのみ込めない小母さんは暫くしてから
亡くなりました。おそらくホームでは次々と第二、第三の姿える老人を作って
金儲けを企んでいるのでしょう　許されることではありません。独身の彼女は
子供も無く老後は誰にも迷惑かけないようにとホームに入って最期を迎えるつもりだったのでしょう。
私共もまさか一両足を棄て姿えさせ不具にしてまで収益を上げるホームが有る等とは
夢にも思いませんでした。皆で「新しいホームが見付かって良かったねえ」と喜んで
上げたのも今はもうとり返しのつかない事となりました。詫びて済む事では有りません
長尾先生、だらくと書きましたが　これはすべて本当に有った事なのです

訴えてやりたいです

（民芸和紙）

良心的なホームも世の中には有る、と信じたいです

戦中、戦後をK子さん達と共に辛うじて生きのびてきた私達の年代は

常に"足るを知る"の精神で暮らして参りました。今や世界中の街々に

物は溢れ、一見幸せそうには見えますが、一皮剥くと中身は腐った果実です

老人相手のホームは"姥捨て銭"どころか"人殺しに追い銭"です

私もその中、死んでゆくと思いますが若しあの世で優しかったK子さんに

逢えたら、しっかり抱きしめて許しを請うつもりです

先生、どうぞお体お大事にされてお元気で長生きなさって下さいませ

末筆乍ら"つどい場さくらちゃん"の丸ちゃんによろしくお伝え下さいませ

終末期の一老婆より。

(民芸和紙)